遊星仮面　リメイク用キャラ設定

（おもにメインキャラ　ゲストキャラは一部のみ）

2023/2/11　追加・修正 by OHYABU

大前提

「地球」「ピネロン星」は惑星名
「地球国」「ピネロン国」は現在のそれぞれの国家体制
「地球人」「ピネロン人」はそれぞれに住む人類の総称

地球在住者

●ピーター・ヨハンセン　※原作より年齢ＵＰ／原作とは異なり、「遊星仮面」も彼の意識
地球人とピネロン人とのハーフ。十七歳。地球の北半球で誕生。自宅は東ユーラシア区にあった。
身長一七五センチほどで中肉。黒髪で、少し灰色がかった黒い瞳。
体形や髪の色、眉や鼻は父似。目や口、顔の輪郭は母似。
ピネロンマークを除くと、一見するとごく一般的な地球人の若者。彼自身も自分を「地球人」だと思っている。
勘鋭く判断速い。ハーフであることからくる差別や偏見から逃れるため、慎重さを演じて生きてこざるをえなかったものの、じつは芯は太くて立ち直りは早い。頻繁に悩み迷うものの、開き直ると（心にスイッチが入ると）一気に走るところがある。
母譲りのピアノと演劇の才があり、開き直ると、さまざまな人物を演じられる。
幼い頃から父**ロバート**とはよくキャッチボールをしていた。投げるのが得意だった。
ロバートから授かった灰色のトランクは、常に持っている。

●リンダ・ソクラトン　※原作よりもクセのある少女に
十三歳だが、歳より幼く見える。ツインテールの髪形の、黒い目黒い瞳のアジア系の顔の、大きな瞳の少女。
ローカル・ワームホールがからむ宇宙航空事故で孤児となっていたところを発見・救出されたとされてはいるが、事実は違う。
ソクラトンに引き取られた時は八歳。直前までは施設にいた。施設に入るまでの記憶は失われている。
過酷な経験があったのか、自分にとって安全かどうかに敏感。学校は「危険」だと感じ、自宅で学んでいる。人見知りは激しく、**ピーター**や**ソニカ**にはすぐに心を許したが、**ベルタ**に慣れるのには時間がかかることになる。
突拍子のない行動に出ることが多く、記憶力が「部分的に」突出する傾向があったが、こ

うした傾向は、自分に自信をつけるにつれて目立たなくなる。
絶対音感を持ち、歌はうまい。他にも埋もれた才能がある。（じつは、実の母親は演説のプロだった。）

●カーティス・ソクラトン
白い髪に白いひげの温厚そうな顔をした、六十九歳。自宅は北米区の海沿い。
専門は宇宙工学だが、人間工学にも詳しく、医師の免許も持つ。
彼の教え子たちの多くは、国の中枢にたくさんいて、**ビッツ**も彼のもとでおもに人間工学を学んだ。
慈善事業にも積極的である。〈逸失の日〉とその後の混乱で孤児になった子供たち（＝コメット・チルドレン）の支援もしていた。
息子夫妻を宇宙航空事故で失い、同事故で孤児となって発見されたとして**リンダ**を引きとったとされているが、真相は異なる。ピネロン星との開戦後は**ピーター**も引きとった。

●ロバート・ヨハンセン
パイロット　四十二歳
地球生まれだが、ちょうど赤子の時が〈逸失の日〉。両親を失い、孤児になったコメット・チルドレン。**ソクラトン**の支援で大学まで通い、パイロットになる。
ピネロン星へ実際にわたった最初の地球人。ピネロン人（**マリア**）と正式に婚姻を結び、子供をもうけた最初の地球人でもある。
その後、両星の重要物資の輸送を担う。義理の弟**アブラハム**を通じ、ピネロン人科学者**ラフラス一家**と知り合ったことで、二つの星の深刻な問題を知ることになる。
ラフラス一家とアブラハムから未来につなげるという技術を託され、それを息子に託し、自分が狙われていることを覚悟で原爆をピネロン星に運んでいる途中、謎の宇宙船爆破事故に見舞われる。
学生時代はベイスボールのピッチャーだった。

●マリア・ヨハンセン（レガイテ・マリア）
ピネロン人。青みがかった灰色の瞳と、薄い褐色の髪。三十九歳
ピネロン星では女優だった。ピアノの腕もプロ級。地球に来てからは翻訳家となる。
母方の一族は、代々ピネロン星の支配層だった。祖父**シアル**は内戦をも生き抜き、「ピネロン国」の高級官僚になった。
しかし、彼女が幼児期に巻き込まれた誘拐事件がもとで、彼女と彼女の一族の激動が始まる。（女優という、ピネロン社会では蔑視される職業についたことも、そうした経験が影響している。）
星間戦争がはじまると、強制収容所に入れられるが、同胞からのリンチで瀕死の重傷を負う。

●グレゴリー・ビッツ

防衛部（旧軍事部）総司令官。五十歳。
父親は学者で政治家、母親は文学者。どちらも〈逸失の日〉以降の社会回復に多大な貢献をしてきた。長男である彼は、激動の社会の中でも最高の教養を得て、自由に豊かに育つ。軍人になったのは親族の影響。
息子は音楽家。娘は画家。甥の**アルバート・バレンチノ**（二十代）は、行政部内政局副長官で、おもに国民情報管理を担っている。金融関係にも親戚がいる。
個々の人間の宗教や嗜好や信条に対しては基本的に寛容。ただし徹底した結果主義＆合理主義者で、大勢のためなら冷酷で非情な決断も下せる。国の安定のためには、監視と統制は必要との信念がある。軍主導の民主主義をめざし、その第一歩として**アデル**を大統領に据えるが、現在では両者の関係は悪化している。
声は、低くしゃがれた威圧的な声。本人にとってはコンプレックスである。
ピネロン星と戦争になる前からキナ臭さを感じていた。そのため、自らが持つ豊富な人材と資金によってひそかに軍備を整えてきていた。
コーヒーが大好き。

●ユジス・ニック
防衛部（旧軍事部）副司令官。四十七歳。独身。物腰は優しく柔らかいが、時に鋭い眼光を見せる。
〈逸失の日〉から二年後、木星から帰途の途中で、両親を失ったコメット・チルドレン。この時深い心の傷を負う。
とはいえ内地海運事業を一手に担うニック海運の直系の長男として、仕事を継いだ叔父夫妻のもとで妹とともに何不自由なく育てられた。叔父夫妻の死後は、妹夫妻が家業を継いでいる。しかしその経緯に謎が。
本人の希望で、叔父たちの反対を押し切り、軍人になる。外地で育った経験を生かし、ピネロン星での人脈を多く作ってきた。現地での地下情報に詳しく、それを通じた諜報活動にも関与している。
射撃の名手。

●ディミトリ・キニスキー
二十八歳。眼光鋭い三白眼が印象的で、軍人で少尉。有能な現場指揮官。
母方の実家は、祖母を筆頭に原理的なキリスト教組織を率いている。土地をめぐりピネロン人移民と対立。彼の父はその騒乱に巻き込まれ……。
彼も彼の兄**ヨハン**も、祖母や母たちの活動には無関心で、反発すら感じているが、不正や賄賂を許さないなど、精神的な影響は受けてきている。祖母が、兄**ヨハン**以上に彼を頼ることが、彼が軍人になった理由にもなっている。
こうした経験からか、ピネロン人への偏見や反発は根強い。
仕事への責任感は強く、特に、家族の延長と考えている自分の部下たちへの責任感は強い。
忠実で規律も正しいため、**ビッツ**からは重宝されているが、原理原則にこだわりがちなために内輪に敵を作りやすい。

●ラフマン・ロペス

背は低いが頑丈そうな体の、濃い色の肌の三十六歳。両親のルーツは南米。

〈逸失の日〉後も駐在兵士たちの食事係としてジュピター・ステーションにとどまった両親のもとに生まれる。両親にネグレクトされた後もステーションにとどまり、そこに住むピネロン人たちと暮らす。

十代の時にニックに保護され、彼の支援の下で学問を学び、彼と同じ軍人に。

戦争前まではニックと暮らしながら、独自活動もしていた。現在は中尉となり、極地・海洋区にあるローレル島に異動。

ピネロン星との交易も、リース財閥とは違うルートで行ってきた？諜報活動も行っていた？マフィアともつながりが？――など、今のところ謎が多い。

ラフラス一家とも（長男の妻**マリア**を通じて）つながりがあり、「遊星仮面」の正体を初めから知っていた。ローレル島の地下にある緊急避難用の海底地下空間を勝手に使い、ある意図のもと、遊星仮面を助けることに。

●マリヤム・アデル

地球国大統領。四十歳。〈逸失の日〉以降、唯一選挙で選ばれた政治家。

青いヒジャブで頭を覆った、太めの眉、ふくよかな体で長身。側近たち（**アイシャ・ドーハ**、**テオルド・マハド**、娘の**ファティマ**）を使っての即効性のある行動をとり、さらに母性的カリスマ力があるため、国民に人気がある。

もともとは地球国の官僚。**リース財閥**出身だが、結婚時の改宗を機に、実家とは断絶している。

軍主導の民主主義を目指す**ビッツ**によって大統領にかつぎあげられたものの、本人自身意欲的だった。大統領就任後は、実家とは異なるピネロン星とのネットワークを築き、ピネロン人も積極的に行政システムに採用する。そうしたこともあってビッツを中心とする軍との関係が悪化し、さらに実家からの干渉を避けたいことなどもあって、大統領府と総務局をアフリカ区へ移転させる。

戦争開始直後には即刻ピネロン人の財産没収を行うなど、一見矛盾した行為も行うが、そこにも意図が。

改宗前の名前はマリア。**ピーター**の母**マリア**のことを知っている。

●レザー・キニスキー

ピーターの親友。十七歳。父はディミトリ・キニスキーの兄、ヨハン。

彼の母は、宗教が違うとして彼の祖母から疎まれていたが、父だけは母をかばい続けていた。そんな父の姿を見て育った彼は正義感が強く、叔父に似て頑固。ピーターにも偏見なく接してきた。

母は三年前に病死。気力を失った父ヨハンを心配した祖母が世話役としてひとりの女性を派遣。のちにヨハンはその女性（リリア）と再婚。

幼ななじみの**ソニカ**を愛していたため、開戦後、父とともに彼女とその父親を助けようとしたが、リリアが叔父ディミトリに通告。ディミトリの逆鱗に触れ、学校を辞めさせられ軍隊に無理やり入れられることに。

表向きには明るくさっぱりし、猥談も頻繁に口にするなど、豪胆に見えるが、じつは心は非常に繊細。
その繊細さが、軍生活の中、上官や仲間が殺されていく中で変質してゆく。

●アルテイカ・ソニカ
地球生まれのピネロン人。十六歳。母親は幼い頃死亡。
父親は教師で、在地球ピネロン人のケアをしており、レザーの父ヨハンの友人で、知名度のあった人物。
開戦後、ヨハンには保護されたがディミトリに捕まり、護送の際の事故で父を亡くす。
この不手際による非難を恐れた軍によって、ピネロン星に送還されそうになるが、レザーとピーターがそれを阻止。ソクラトン邸宅で一時保護される。しかしディミトリに見つかり、ローレル島に送り込まれる。
音楽オタクで、作曲家を目指している。父親がどこかで手に入れた笛、アルギナを常に持ち続け、吹くのもうまい。ピアノの腕も一定レベルにある。
ただ父親とは違い、他者とのコミュニケーションはうまくない。レザーから思いを寄せられていることにも気づかない。見かけはいわゆる美少女に当たるが、「変わり者」的生格ゆえに、敬遠されがちで孤立しがち。しかし打たれ強く、負けず嫌いである。
楽譜を使って、自分を慕うリンダと通信し合っている。

●パイク
二十九歳。元ゴシップ専門の新聞記者。バツイチ。
現在は防衛部（旧軍事部）や行政部の闇にからみ、彼らの便利屋をこなしている。相棒のマック相手にベラベラしゃべっているが、依頼元の秘密は基本漏らさない。
金のためなら何でもするように見えて、誰よりも事態を冷静に見通す。
現在はロペスに雇われたかっこうになっているが、金だけの関係と割り切っていて、服従はしていない。

●マック
二十六歳。パイクの助手だったが、そのまま彼に従う。
太って愚鈍なように見えるが、意外にも器用で、パイクには逆らわず口も意外にかたい。

●ベルタ・グラナド
二十四歳。軍曹。のちに曹長に。
凄腕の射撃手であり優秀なパイロット。**ロペス**の部下として置かれてはいるものの、実質ビッツの命令で動き、一時期ピーターとリンダの監視と護衛に当たっていた。
実家は南米のアンデス地方の農家。親は貧しさから、義務教育を受けさせるためにと、ビッツの妻のミルドレッドが運営する軍事学校の初等課に入れる。
そこでめきめき頭角を表す。頭の回転は速く、体術にも優れていたために、学年も飛び級で進んだ。**ディミトリ・キニスキー**とは同期。
その後父親は他に女性を作って家を出て、母親は過労死したため、祖母と弟妹五人を養う

ことに。
彼女自身は軍隊や軍人が嫌いで、そういう上下関係も嫌いなので、たびたび上官と衝突を起こし、昇進できずにいる。教師の資格も転職を求めて取ったようなもの。（なお現在の上官のロペスとは、今のところ衝突はしていない。）
夢はお金を貯めて軍隊を辞め、実家のために土地を買うこと。
ピネロン人の友人がいる。

●ファラン・ティエン
四章以降に登場。大佐。外地軍司令官。
中央アフリカ系と東アジア系の血が混じっている。小柄だが筋肉質の体。パートナー（女性）は兵站部に勤務している。
孤児で、幼い頃は窃盗で生きていた。（時に殺しや売春も。）この頃の経験から、ピネロン人が嫌いになる。
犯罪からの更生のためミルドレッドの両親が運営（現在はミルドレッド本人が運営）する軍事学校の初等課に入れられ、そのまま軍人となる。
人間コンピュータと言われるほど、頭の中で宇宙地図を展開できる天才。拳法などの護身術の達人であり、パイロットとしても傑出。そんな彼女の才能は**ビッツ**が見出した。そのため三十八歳と若いが、現在軍ではビッツ、ニックに次ぐナンバー3の位置にまで昇りつめた。
部下に対しては基本平等。ただし要求レベルが高く、ついてこられない人間は部下から外す。特に側近を選ぶことについてはえり好みが強い。天才が好き、
同じく貧しい環境で育ち、同じく天才肌である**ベルタ**を、高く評価している。（しかしベルタ自身は彼女を嫌がっている。）

●シリカス（名前は不明）
三話で登場。その時は、ジュピター・ステーションの副館長だった。四話で消息が語られる。
ステーションを守り抜くが、一部勢力の策略で消息を絶たざるをえない羽目に。

●クラーク（名前は不明）
五章のみ登場。中尉。
一章で、東ユーラシア区の兵站局局長だった父親がディミトリ・キニスキーに横領で逮捕され、母親が自殺未遂にまで追い込まれる。そのことでディミトリを怨み、彼の甥であるレザーに対してはスパイの疑いをかける。

●ピレイ（名前は不明）
五章のみ登場。少尉。
クラークの部下として行動するが、じつは本物になりすましたピネロン側のスパイ。
開戦直後から、地球や地球軍の情報を本国に詳細に報告していた。

●ミルドレッド・バレンチノ
六章以降に登場?ビッツの妻で、大富豪の娘で、元教育関係者。多くの学校を経営し、さらにＮＧＯを立ち上げボランティア活動に専念。

●ネティマ・ニック
四章以降に登場。ニックの妹。四十六歳。夫の**サンジャイ・カーン**はニック海運のＣＥＯ。五人の子あり。
兄を慕いながらも、幼い頃から彼に対し、ある引っかかりをもっている。（それがある種の精神不安にもつながっている。）

●イツハク・リース
六章以降に登場?四十三歳
リース財閥の次期後継者。**マリヤム・アデル**の実兄で、実家から縁を切られた彼女と唯一交流があった。
原爆処理をめぐりリーズ財閥への非難の中、実家と離れ、あらたな軍事利権に手を出すことに。

●カーライル（名前は不明）
地球国初代大統領。故人。それ以前は国連事務総長。

●フキヤ（名前は不明）
地球二代目大統領。故人。軍出身。

ピネロン星在住者

●ラフラス・ヤート
十八歳。身長一八〇の長身。手足大きく、長いまつげ。他の家族とは違い、ピネロン人にしては珍しい黒い髪に黒い目。
頭脳明晰だが、怖いもの知らずで無鉄砲なところがあり、エリート意識は強く、特に自分の家族に対する誇りが高い。協調性はなく傲慢に見えがちだが、性根は素直で情に厚い。
父母兄は忙しく、代わりに兄嫁マリアに可愛がられた。
兄同様、あまり父母の才能は受け継がれていない。メカ操作と絵が得意。
両親が設計に関わったメカニックの一部を、脳波で操れる。（彼本人が知らないうちに、そのように作り替えられていた。）
なぜかホイヘンスに気に入られるが、本人は一度脱走する。その後、反ホイヘンス勢力に捕まるが、彼らのやり方にも幻滅してしまう。
彼の家族は、科学者グループ「ソルド派」の流れをくんでいる。

ラフラス・ムスート（父）**ラフラス・レアザ**（母）
脳波誘導システムの権威。物質伝導システムも利用し、のちの遊星仮面の技術の根幹となる「孤槍システム」を作り上げた。
しかしのちに、地球とピネロン星との重大な秘密を知ることに。
ムスートの祖先には「アルギナの民」がいる。

ラフラス・テスート（兄）　科学者ではあるが、父母や妻の助手がつとまる程度。交渉術にたけていたため「営業」や「経理」などを担当していた。

ラフラス・マリア（兄の妻）　地球人科学者。**ラフマン・ロペスとつながりがある。**
レーザーに詳しく、脳波誘導システムを組み込み、レーザー切断機（シューター）を作り上げた。
彼女が設定したレーザーの「周波数」は独自で、シューターのみならず、ヤートが扱うレーザーにも、ロペスがローレル島に巡らせることができるレーザーにも応用されている。

●チャウ・ハザス
マリア、シアル、アブラハムの父。科学者。故人？
マリアの出来事がもとで、舅の**シアル**から追い出される。その後別の女性との間で生まれたのが**アブラハム**。

●レガイテ・シアル
マリアの同母兄。四十二歳。スキンヘッド。
母方の祖父と同じ名前をもち、祖父と同じく官僚の道を歩み、ホイヘンスのクーデター後は彼につく。

●チャウ・アブラハム
マリアとシアルの異母弟。二十二歳。
姉マリアとは仲が良かったが、兄シアルとは最近までほとんど接触はなかった。
ピネロンを代表する若手天才科学者だが、かなりの変人。どこの派閥にも属さずマイペースだったが、最終的にラフラス一家と合流する。
科学者とはいえ技術肌で、機械工学が得意。ライダーと、「個人的趣味」に基づくスーツのデザインは、彼の手による。
ひとまわり年上の妻がいる。医療関係を統括している。
妻とともに現在行方不明（ホイヘンスのひとり娘のもとに……。）
ピーターは、歳があまり離れていないこの叔父を「エイブ兄さん」と呼んでいた。

●ホイヘンス・レム
四十五歳。軍人。背は高く猛獣を思わすような凶相。
常に、右手には長い棒のような電子鞭をもつ。
同じ名前の実父は、ピネロン星の内戦を終結させたとされる軍人だが、一部の人間にとってはたいへんな暴君で、謎の死をとげている。

他者を信じず、サディスティックで冷酷で残虐な面を見せる反面、計算高く、相手の人間性やその能力を見定める力がある。自分に足りない点を素直に自覚し、それを他者の力で補完することを恥とは考えない。（ある意味他者はコマだと考えている。）
ピネロン星とピネロン人には誇りをもっている。統治は専制的だが、国民の最低限の安全や生活を保証するといったことは忘れない。兵隊の消耗には基本慎重。実父に似てＤＶ気質だが、本当に自分が気に入った者や、本当に自分に従う一部の者たちには優しい一面がある。（とはいえイモシに対しては容赦ない。）
情勢の変化に対応できる合理性をもつ。一方で情緒的な一面、気分屋的部分もある。ヤートを気に入ったのもそうした彼の一面？
トロント市に在住していた姪と、植物状態になったひとり娘の名がどちらも**マリア**。娘の母親の出自と消息は……。
地球侵攻には、報復以外にも目的がある。それには個人的な背景も。

●イモシ・クワル
年齢不詳。小柄。頭髪はほとんどないが、豊かなあごひげ。右目が眼帯で覆われていた。横に広がる口から、少し甲高い声。
ホイヘンスは、十代だった内戦時に彼に会っており、それが信頼に結びついている。さらに、しばらくラフラス夫妻のもとにいたことも評価されている。
しかし当のラフラス夫妻からは、ほとんど信用されていなかったようである。
今のところ彼の経緯は謎に包まれている。

●ハチュン・ザウリ
二十五歳。見かけや能力、部下思いであることなどはディミトリ・キニスキーに似ているが、性格は異なる。
すでに妻子もちで、家族思い。私生活は穏やか。
両親がホイヘンスの父の部下だったため、ホイヘンスへの心からの忠誠を見せる。彼の残酷さも、社会を正すためには必要だと考えている。
たいへんな部下思いで、彼らの命を救うために命をもかける。

●スピン・アレクラ
六章以降登場？
イモシの命令のもとで動く、優秀な軍事技術者（女性）。
内戦で家族を失い、怪我で車いすに。

●ゲルゴン・ザイ
三十五歳。
目と耳以外全身黒におおわれた、一見「妖しい中性的なイケメン」。
サップスの団長。「アルギナの民」の末裔である彼は、ホイヘンスに恩があるため、絶対服従を誓っている。ただ彼は、自身の出自である「アルギナの民」についてはほとんど何も知らない。

●ステッキィー（名前のみ）
四章にのみ登場。
二十八歳。サップス。一部で「ソルドの落とし子」と呼ばれる、内戦で親を失った子供のひとり。ゲルゴンに育てられた。